

# 「キッズプログラム」116人が大会サポート

2024ワールドトライアスロン・パラトライアスロンシリーズ横浜大会では、子ども達がスポーツを通じて「する」「みる」「ささえる」ことの大切さを学び、夢や希望を持ち成長する機会として「キッズプログラム」を企画し、応募総数のべ177人の中から、抽選で選ばれた116人の子ども達が参加した。今大会のキッズプログラムは、エイジグループ（一般）の大会にも拡大し、「フィニッシュキッズ」を新設した。

**こどもスポーツ記者 10人**  
エリートパラトライアスロン・エリート女子のレースを撮影し、出場選手に取材を行った。こども達は事前に、大会概要や新聞記事の書き方、キャノンのミラーレスカメラの操作方法などのレクチャーを受けて大会に臨み、当日はフォトグラファーによるサポートのもと、迫力のあるレースを写真に収めていた。レース後は自由参加選手、宇田選手が取材に対応し、こども達は思い思いの質問を投げかけた。このプログラムは、キャノン、日刊スポーツ新聞社、大会事務局によるパートナーシップ事業として行われた。

**エスコートキッズ 8人**  
エリート女子・エリート男子のメダルセレモニーで、表彰選手（1～3位）と手をつなぎ、表彰台までエスコートした。セレモニー前には選手と写真を撮るなど、世界のトップ選手との交流にこども達は興奮していた。

**ハイタッチキッズ 20人**  
エリート女子・エリート男子のスタートセレモニーで、スタート前の選手をハイタッチで送り出した。レース直前で緊迫する場面の中、こども達の元気あふれるエールをもらった選手は、笑顔でスタートエリアに向かった。

**エスコートキッズ 8人**  
エリート女子・エリート男子のメダルセレモニーで、表彰選手（各カテゴリー男女1～3位）に花束を贈呈した。車いすや義足を使用しているこども達も参加し、笑顔と感動があふれるセレモニーとなった。

**ブーケキッズ 9人**  
エリートパラトライアスロンのメダルセレモニーで、表彰選手（各カテゴリー男女1～3位）に花束を贈呈した。車いすや義足を使用しているこども達も参加し、笑顔と感動があふれるセレモニーとなった。

**キッズ応援団 29人**  
フィニッシュ前の直線コースを駆け抜けていくエリート選手を、特別観覧エリアで応援した。最後の力を振り絞る選手の意遣いを間近に感じ、フラッグを振ったり大きな声を出したりするなど、それぞれの方法で応援していた。

**エイドキッズ 9人**  
フィニッシュ後のリカバリーエリアで、レースを終えたエリート選手にタオルやドリンク、バナナなどを手渡した。全力を出し切った選手達をおもてなしするため、こども達は緊張しながらも選手と触れ合い、健闘をたたえた。

**フィニッシュキッズ 31人**  
エイジグループ（一般）の大会で、こども達がフィニッシュテープを持ち、見事完走した選手を迎えた。疲れ果てていた参加選手も、こども達の一生懸命なサポートに頬が緩み、笑顔でハイタッチしていた。

## 藤巻 優衣 (小学5年生)

「いけー」選手が自転車で走っているところを、たくさんの方が応援していました。そして、その応援を聞いて、選手たちは、自転車をピュンピュンこいだ後、5kmを走っていたのがとてもいっしょに残りました。自分で走っているところを、たくさんの方が応援して、その応援を聞いて、選手たちは、自転車をピュンピュンこいだ後、5kmを走っていたのがとてもいっしょに残りました。



「絶対に負けない」という気持ちで走っています。自転車でカーブのときでもスピードを落とさず走っています。

## 大杉 思帆 (小学6年生)

私は今回、パラトライアスロン取材に感じたことがあります。それは「スポーツのあたたかさ」です。最初、私は「たくさんの方が応援しているな」と思っていました。しかし、レースが進む中で心があたたかくなっていきました。



家族ってやっぱり大切なんだ。スポーツのあたたかさに支えられているのではないかと、思いました。

# 10人のキッズ記者が見た撮った思った



## 小野 太郎 (小学6年生)

泳いで、こいで、走るか、乗るか。これがパラトライアスロン。手足が不自由なハンディは関係なくスピードや迫力が段違いです。トライアスロンをあまり知らない私から見てもすごい感じが伝わってきます。特にスイムで後を取った選手達は次のバイクで「絶対に巻き返せよ」と、気持ちがこちらに伝わってくるほどの迫力でした。



## 飯塚 晴 (小学5年生)

「人間は強い。」それが今回の取材体験をした一番の感想です。スタートを待つ選手たちからは、オーラが見えるようでした。今までの努力があふれているようでした。足や両手が不自由でも、自らが不自由でも、こんなに強くてカッコいい人がいることを初めて知りました。



## 大和田咲希 (小学5年生)

私は2024ワールドトライアスロン・パラトライアスロンシリーズ横浜大会取材をしました。撮影カマのバイクが追いつくのも大変な速さでレースをしていたのが、とても印象に残りました。トライアスロン最後の競技であるランでは、ゴール前で取材をしました。どの選手も最後の力を振り絞って息をあげながら走っていました。しかし、苦しい表情だったのが沢山の声援で笑顔になっている選手もたくさんいました。一生懸命レースに挑む選手の姿に私は沢山の感動をもらいました。レース後に、表彰選手と宇田選手に「レース前にすること」についてインタビューしました。表彰選手はレースウェア姿を自撮りして、家族に送っているそ



## 西野 桜彩 (小学5年生)

5月11日のよく晴れた青空の下で世界トライアスロンシリーズ横浜大会が行われました。トライは3の意味でアスロンは競技の意味です。スイム、バイク、ランをします。いろいろな国から集まり、1人ずつ名前を呼ばれ入場する選手たちは身体がひきしまり筋肉がもりもりと、きたえられていました。競技後の宇田選手とは選手のインタビューでは、つらいことがあっても少しずつ成長している自分を見つけ、そのことを大事にすることが人生を楽しむことになるということを学びました。わたしも少しずつ大切にがんばろうと思いました。



「嫌いなことをつくってはいけません。」「絶対に巻き返せよ」と、気持ちがこちらに伝わってきました。強心を打たれました。

「人間は強い。」今回の一番の感想です。足や両手が不自由でも、目や両手が不自由でも、こんなに強くてカッコいい人がいることを初めて知りました。

最後までがんばる選手たちを応援したい。いいなと思います。感動しました。